

<b>1 学校教育目標</b>
三綱領のもと、知・徳・体の調和がとれた教育活動を展開し、高い知性と豊かな感性を持ち、心身ともに健康で、主体的に考え判断し、行動できる力を備えた地域や社会の発展に寄与する人材を育成する。

<b>2 本年度の重点目標</b>
<b>1 学習指導の充実</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「南陵スタンダード」と分かる授業の推進</li> <li>・ ICTを活用した個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実</li> <li>・ 「主体的・対話的で深い学び」の充実</li> <li>・ 観点別評価の適正実施</li> <li>・ 読書指導の充実</li> <li>・ 社会とつながる実学教育の推進</li> </ul> <b>2 基本的な生活習慣の確立と規範意識の高揚</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 「挨拶・時間を守る・服装の整備・掃除」習慣の定着</li> <li>・ お互いの個性を認め合い、支え合うことができる集団の育成</li> <li>・ 学校行事や部活動、ボランティア活動などを通じた自主性と主体性の育成</li> <li>・ 地域や異年齢集団との交流活動を通じた自己有用感の醸成</li> </ul> <b>3 教育相談体制の充実</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 個別の教育支援計画と指導計画による指導の充実</li> <li>・ いじめを許容しない雰囲気醸成</li> <li>・ 自他の大切さを認め、豊かな人権感覚を育てる集団づくりの推進</li> </ul> <b>4 安全・防災・保健・環境教育の充実</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 生活安全、交通安全等の安全教育及び防災教育の推進</li> <li>・ 危険を予知し回避する実践的行動力の育成</li> <li>・ 健康教育の推進と検診後受診率の向上</li> <li>・ 学校版ISOの推進</li> </ul> <b>5 魅力ある学校づくりの推進</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 地域貢献活動の推進</li> <li>・ 自治体や関係機関との連携強化</li> <li>・ HPの充実と最新情報の発信</li> </ul> <b>6 働き方改革の推進</b> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 心身ともに健康に働ける職場づくりの推進</li> </ul>

<b>3 自己評価総括表</b>						
評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	持続可能な学校運営	部活動や舎監等を除く業務を勤務時間内に終わることを継続させる。	部活動や舎監等を除く業務を勤務時間内に終わる。	業務の精選および職員の適正配置 各分掌部における業務の平準化	A	○各部署において業務の精選や、行事の簡素化を行った結果、行事の準備等の負担が減った。 ○部活動指導員、教員業務支援員、寄宿舍管理業務職員を任用し、職員の業務の負担軽減を行った。 ○慣例として残っている行事等もあるため、今後さらに精選を図る。
	業務の改善	実効性のある業務改善の実施	「働き方改革を意識した業務遂行ができている」職員85%以上	校務処理の仕組みの見直しと効率化 ノー残業デーで	A	職員アンケートでは「南陵高校は働き方改革が計画的に推進されている」は78.3

			(前年:78.9%)	の定時退勤の徹底		% (61.8%) で16.5p上昇し、「私は働き方改革を意識し、業務の効率化と計画性を図っている」が95.7% (78.9%) で、16.8p上昇した。働き方改革の推進、個人の意識や効率化と計画性ともに昨年度より大幅に改善した。
	働き方改革の推進	働き方改革の実践	時間外勤務の縮減 (超過勤務が月平均時間37時間)	目標は上期で月平均40時間、下期で月平均34時間	A	4月～12月の月平均残業時間は30時間03分(43時間07分)で目標を大幅に達成している。今年度から学校日課を15分繰り上げ、部活動の終了時間を30分繰り上げたことが大きな要因であると考えられる。
	募集定員の確保	入学者数の確保	入学者数130人以上 (前年:124人)	ホームページやマスコミ等を活用した本校教育活動の周知 体験入学及び中学生保護者向け学校説明会(地域未来留学を含む)の充実	B	○各学科ともに職員が熱心にホームページで最新の情報の更新を行った。 ○体験入学に加えオープンスクール(土曜日)を開催し、本校の普段の様子を多くの方に見学してもらった。また、地域未来留学の説明会(東京、大阪)に参加した。 ○定員確保に向け、様々な取組を行った結果、前期(特色)選抜志願者数は113名(111名)と前年より2名増加。
学力向上	わかる授業の実践	授業改善	「授業が理解できた」生徒90%以上(前年:90%)	個別最適化の観点で各教科及び学科内で授業内容の振り返り(公開授業期間・授業研鑽)	A	授業で「わかった」「できた」という達成感があると回答した生徒は約93%であった。今後も生徒への学習に対する興味・関心を高めるような工夫及び「南稜スタンダード」の理念に基づいた授業実践を継続していく。
			ICTを活用した授業実践を進め、教師のKI(くまもとICT)指数	各教科における南稜スタンダードに基づいた効果的なICT活用	B	教師のKI(くまもとICT)指数は89%であった。職員研修の場等を通して授業での

			90%以上（前年：80%）	の充実		実践へとつながるICTの活用について考えていくとともに、限られた学習時間を効率的に運用する観点からもICTの活用を図っていく。
	学習習慣	欠席防止	年間出席率95%以上（前年：94.7%）	○各部との出欠状況の共有 ○担任や学年団を中心とした愛の1・2・3運動+1（プラスワン）の実施	A	13クラス中10クラスが95%以上を達成した。学校全体としては96.1%（12月末）で昨年度より1.4p上回った。引き続き学習意欲の更なる喚起、及び不登校傾向生徒への継続的な対応を実施していく。
キャリア教育（進路指導）	進学・就職支援	進路目標の達成	進学・就職とも、志望先への合格・内定100%（前年：100%）	希望調査と面談による適正な選択の支援	B	1月以降に試験がある生徒以外は、民間就職をはじめ国立大学1名を含め全員が進路目標を達成。
	定着指導	就業の継続	1年以内の早期離職率10%以下（前年：4.6%）	○就職先企業への訪問等による情報収集 ○3年生への早期離職防止のための講話	B	令和7年3月卒業生で1年以内の離職者は5名（7.5%）。目標値以内だが、昨年度よりも増加。
生徒指導	生徒の自発的・主体的な成長や発達を支える指導	生徒が南稜高校の一員として役割を担い持てる能力を発揮して、協働し、互いの人格を尊重し合って生きることの大切さを学ぶ学習活動の充実を図る。	○社会的資質・能力の育成 ○「私は学校行事や部活動、ボランティア活動などに積極的に参加している」生徒80%以上（前年：73.9%）	学校行事等の特別活動に生徒が積極的に活動するための生徒会活動の推進	B	結果は77.8%であったが、今年度より月1回の委員会活動を行うことで、生徒の自主的な活動は増えた。
			○自己指導能力の育成 ○「南稜高校に通うことは、自分の将来にとって意義があると感じている」生徒90%以上（前年：91.9%）	体育大会等の集団活動を通じた連帯感や、集団社会における望ましい態度や行動の育成	B	結果は89.9%で目標に0.01%足りなかったが、概ね高い評価を得ているため、今後も学校行事を通じた育成を継続するとともに、生徒主体の行事運営に努めていく。

人権教育の推進	自他の大切さを認め、豊かな人権感覚を育てる集団づくりの推進	体育大会・南稜祭、講演会など振り返りの時間を設定し、実践を定期的に振り返り意識化を図るとともに結果を分析し、次の課題解決に生かす。	「私は南稜高校での人権教育をとおして他人を思いやる心を持ち、人に優しく接しようとする思いが強くなった」生徒90%以上（前年：92.3%）	○1年次の至誠寮短期宿泊研修による、集団の中でよりよい人間関係を自主的に実践的に形成する力の育成 ○6月の人権教育LHR、10月の人権教育講演会の実施による、集団の中で自己の生活の課題を発見しよりよく改善する力や自己の理解を深め、自己のよさや可能性を生かす力の育成	B	結果は91.6%（92.3%）の評価。数値の変動は僅差であるが、人権教育講演会のテーマ設定や内容の伝え方について検討の余地があることが示唆された。
	命を大切にすることを育む指導	社会の変化に対応して主体的に判断するため、よりよい生き方を選ぶ上で必要な、選択基準ないし判断基準を育成する。	「私は南稜高校での人権教育をとおして、命の大切さを再認識した」生徒90%以上	○9月に行われるストレス対処教育LHRによる、命に向き合うまなざしの育成 ○11月に行われる収穫感謝祭による、いのちをいただくことの意味と他者や自然への敬意の学習	A	結果は100%達成。人権学習と日頃の授業における学びが相乗効果を生むことでのちの尊さをより深く実感することができた。
いじめの防止等	いじめの未然防止・早期発見・事案対処	いじめをしない態度や能力を身につける働きかけを行い、いじめを生まない環境づくりをする	○「南稜高校の先生は、悩みや相談に親身になって応じてくれる」生徒90%以上（前年：89.2%）  ○「南稜高校ではいじめや暴力などを見過ごさず早期に対応してくれる」生徒90%以上（前年：84.2%）	○普段からの面談、スクールサイン、生徒支援会議や、学期に1回アンケート等を実施し、生徒の把握と教員間の適切な情報共有や、いじめの早期発見に努める。 ○情報集約当者である学年主任を中心に、集約された情報を基に組織的にいじめ防止の対応を行う。	B	○結果は86.5%で目標には至らなかった。スクールサインでの、いじめに関する投稿が0件であったため、今後はスクールサインについての案内の強化や投稿しやすい環境づくりを目指す。 ○結果は85.5%。各学年主任を中心に情報の集約は組織的に行うことができた。しかし、双方の聞き取りなど、対応に時間がかかったこともあり早期にという部分で課題が残った。 (R7いじめ認知件数) 1学期：4件 2学期：3件 3学期：2件

			「南稜高校は落ち着いたよい学校である」生徒75%以上（前年:64.1%）	LHRを活用し、ストレス対処やアンガーマネジメント、SOSに気づく力などを身につけ、いじめが起きにくい環境づくりに努める。	C	結果は67.1%で目標達成には至らなかったが、昨年度よりも3.0p上昇した。今年度は校内での生徒同士のトラブル等もあったことが原因とも考えられる。集会等でアンガーマネジメントについて講話等もしたが、そういった機会を増やしていきたい。
地域連携(コミュニティ・スクールなど)	学校運営協議会の開催	総合型コミュニティ・スクールの実践	「地域や学校の実態を踏まえた授業や関係機関と連携した授業など特色ある授業に取り組んでいる」教員90%以上（前年:94.1%）	○学校運営方針の周知と共有 ○学校の課題や情報等の共有 ○学校の課題の解決に向けた協議	B	○授業においては生徒の97.3%、保護者の95.9%が特色ある授業を受けていると肯定的回答であった。一方で、特色ある授業に取り組んでいると回答した職員は81.0%と昨年の94.1%を大きく下回った。 ○運営協議会では、学校運営方針の周知や学校課題の解決に向けた意見交換ができた。
	地域連携	地域とともにある学校づくりの実践	「地域連携や地域活性化に関する活動への参加」生徒100人以上（前年:100人）	○地域イベントへの積極的参加と地域と連携した研究活動の推進 ○各学科での開放講座の実施	A	各学科、様々なイベントに積極的に延べ147人の生徒が参加した。ただ、一部に偏りが見られるところもあった。
		地域資源の活用	○「郷土に誇りを持っている」生徒90%以上（前年:96.7%） ○農業系学科・コースで、地域資源を活用した授業・行事を年に2回以上実施	地域特産物や人材を活用した授業展開による郷土愛の醸成及び新たな地域資源活用方法の提案	A	「郷土(人吉球磨)が好きである」は91.6%であった。農業系学科では、地域振興局や地元自治体、各種産業と連携した授業を数回実施し、事後のレポートからも生徒の学習の深まりを感じることができた。
特色ある学校づくり	専門教育の充実	南稜スタンダード農場版の実践	「専門教科に興味・関心がある」「学習内容を理解している」生徒90%（前年:94.2%）	○基礎、基本を押さえた授業の実践 ○全教科でポートフォリオ評価の徹底	B	「南稜高校では、他校にない特色ある授業を受けることができる」は97.3%と高かったが、授業評価の「専門教科に興味関心があります

					か」は80.3%で他の項目に比べて低い結果となった。今後、授業や実習を通して、更に産業教育の重要性を伝えていく。	
特別支援教育体制の充実	個別の教育支援計画と指導計画による指導の充実	人吉球磨地区特別支援教育ガイドラインに基づいた個別の教育支援計画・指導計画の作成と活用	「南稜高校の先生は私の個性やニーズに合った指導や支援を行っている」生徒85%以上(前年:86%)	○月1回実施の生徒支援会議において各学年及び学科から生徒情報を集約し、組織的かつ適切な支援体制の構築を図る。 ○SCおよびSSWと連携し、必要に応じて外部機関との連携強化を図る。 ○教科担当者会を開催し、教科担当者の共通理解と好事例の共有を行い、生徒の学習環境を整備し、個別最適な学びを促進する。	B	結果は87.8%であった。「特別支援教育への理解が進んでおり、組織的、体系的な支援が行われている」保護者評価79.4%、職員評価78.3%であった。次年度以降、特別な教育的ニーズのある生徒の実態を職員間で共有する組織的な支援体制を充実させる。さらに、保護者への支援や協働に関する役割を担う教職員の専門性向上に努め、積極的に外部機関との連携を図っていきたい。